

▼オピニオン：インフラテクコンを通じた将来の姿（実行委員執筆リレー3） ツナガル・ツナゲル・インフラテクコン

（一財）日本橋梁建設協会 保全委員会 幹事長
（株）駒井ハルテック 橋梁保全事業室 部長
本間 順



はじめに

「インフラマネジメントテクノロジーコンテスト」の実行委員として参加している本間と申します。所属は橋梁メーカーですが、仕事の大半は日本橋梁建設協会（以下；橋建）の保全幹事長として、鋼橋の保全事業の環境整備のための活動を行っています。

実行委員会の岩佐副委員長から、一緒にやりませんか？とお誘いを受けた時に、ろくに内容も聞かずに心の中では「YES」のフラグが立っていた。年齢を重ね、ワクワクしない仕事は基本しないように心がけている。この企画は最初からワクワクでいっぱいであった。まだ、産声を上げたばかりのコンテストであるが、どのような思いで参加していくか執筆をしながらあらためて考えてみたいと思う。

鋼橋業界の今

私が橋建に参加したのは、平成9年からでほぼ四半世紀のあいだ、協会の活動を行ってきた。鋼橋の新設需要（発注量）は発注トン数で表され、最盛期の平成7年には86万トンであったが、令和元年には13万トンと激減している。当時の鋼橋の補修・補強は新設のおまけ（アフターサービス）程度の認識であったが、平成25年の社会資本メンテナンス元年から右肩上がりに増え、平成26年→令和元年の6年間で協会加盟会社の保全工事受注金額の合計は3倍に増え、新設との比率も30%を超えるまで成長した。私が協会活動を開始した時は、鋼橋の補修・補強の技術の向上や開発、その普及に努めてきたが、近年はある程度技術が確立されたため、契約制度上の課題解決に取り組みこととした、それに関しても課題解決の方法が見え解決に向かっている。

協会が抱える現在の最も深刻な課題は需要に対する技術者の不足である。新設に軸足を置いていたため、鋼橋の補修・補強を行える技術者数は十分ではなく、かつ育成には時間が要するため、年々増加する保全工事に十分に対応できている状態とは言えない状況が続いている。このため、鋼橋の魅力を社会や学生に広報する組織「みかんPJ（未来の幹を育てるPJ）」を令和元年に立ち上げ活動を開始した。各社の若手（平均年齢29歳）を10名程度集め、ベテランにない新しい発想や手法を用いて鋼橋や鋼橋の仕事のPRを行っている。その、活動を通じて「インフラメンテ国民会議市民参画フォーラムの活動」を知りツナガルことができた。



橋梁維持管理カードを体験するみかんPJ

みかんPJの活動

いくつか、みかんPJの活動の一部を紹介させていただく。（→協働団体）

- ・木更津高専・明石高専「1日鋼橋専門学校」（鋼専）→循環式プラスト協会、ツタワールドボク
https://www.youtube.com/watch?v=BKZXa_I5sH8 →QR①
- ・鋼橋のペーパークラフトの製作（小学生～大人）→東京都、大阪府、首都大学東京
<https://www.jasbc.or.jp/wp/wp-content/themes/jasbc/images/pdf/wg191104.pdf>

- ・紀寿橋梁生誕 100 年祭→周南市、デミーとマツ、徳山高専
<https://www.youtube.com/watch?v=T-9n1S8KmpU> →QR②
- ・job カフェ→DobokuLab、
https://www.youtube.com/watch?v=FgaXhY2r_x4&feature=emb_logo
- ・インフラテクコン（プレプレ競技会）→DobokuLab、インフラテクコン
<https://www.youtube.com/watch?v=5Xys5nJsSB0> →QR③



QR①



QR②



QR③

ツナガル・ツナゲル

みかん PJ の活動を通じ多くの団体と繋がり協働することができた。インフラに関して近代土木から「作る」ことが主目的であり、かつそれが社会の要請でもあった。その頃の課題と比べて、現在のインフラの課題は質が大きく異なり、解決も難しく容易ではないと言える。そのような複雑な課題を解決するには多種の技術者や団体が繋がり議論し、解決の方法を「創る」ことが必要であると考えている。インフラテクコンは高専生のためのコンテストである。よって、高専生がコアターゲットである。一方で、運営側や協賛企業などの団体が結びつくことで、インフラの課題に対する新たな解決手法が創れる場（薄い緑部分）であるとするならば、セカンドターゲットは企業や道路管理者と言える。3月に予定されている交流会（名称未定）に関する企画立案において、セカンドターゲットにおいて意識しながらデザインしていきたいと思う。



かなり、橋建の内容が多くなってしまったが、私自身が協会の課題を解決するため比較的内向きな活動から外を向いた活動に変化させたため、多くの方と知り合いうことができた。これによって、新たな課題を解決する方法や、気づきをもたらした。このような、新たな解決方法が「創れる」場が提供できるように活動していきたい。